

太宰治：「疎外された者」と「隣人愛」

－『惜別』を中心として－

李 智 賢*

本論文では、従来の研究においてあまり注目されなかった太宰治文学における<隣人愛>の問題を、疎外された者との関連性から考察した。太宰は聖書を読み始めた1937年頃から<隣人愛>という言葉を作品中に使っていたが、日本文学において聖書的な意味での<隣人愛>を使ったのは太宰文学が最初であると推定される。

しかし太宰は独自の解釈を通し<隣人愛>を理解していたとみえるが、太宰の<隣人愛>の使い方と意味を調べるため、太宰の作品に<隣人愛>という言葉が集中的に使われていた時期の小説『惜別』を考察した。『惜別』の「私」が「周さん」と「藤野先生」という<日本語不自由組>に向け使っている<隣人愛>をみると、太宰が語る<隣人愛>は、コンプレックスを共有した「親和感」と、「同質感」が大きく作用していて、マイナー連帯の共感に似たようなものであることがわかる。つまり、太宰の<隣人愛>は自分の痛みを投射した、一方的な同情のような性格を持っているものといえよう。

自分を疎外された者だと思っていた太宰は、自分のように「日陰者」の思いに悩まされている人物を見つけ出し、共感とやさしき、同情を送っていて、<隣人愛>を語っていた。そして、太宰作品のこのような傾向は『人間失格』等の後期作品にまで続いている。

キーワード：惜別、疎外された者、隣人愛、マイナーの連帯、太宰治
(석별, 소외자, 이웃사랑, 마이너 연대, 다자이 오사무)

1. はじめに

太宰文学の登場人物はよく「心よわきもの」、「世の片隅につつましく生きるもの」¹⁾のような弱者の立場を引き受けていて、進んでは自虐

* 釜山大学校 日本研究所 Post-doc, jihyunlee@pusan.ac.kr

1) 佐藤泰正(1997)「弱者の倫理」『太宰治論』翰林書房、p.205.

や破滅の姿勢をとっているが、こうした社会の「弱者」の人物が、太宰文学のイメージの一つを成していると言えよう。

太宰文学のこのような特徴を、奥野健男は『太宰治論』において「下向志向」であると表現し、「ナルシシズムに対しては自己破壊を、生家に対しては脱出を、そして社会秩序に対しては反逆を、これが太宰の一生を貫く下向志向の道です」²⁾のように性格づけている。このような弱者の視点が太宰の初期文学から影を落としているのと関連して、「疎外感覚」³⁾をも太宰文学の特徴的な面として挙げる事ができる。実際太宰文学には社会から疎外された者が登場し、他者としての思い悩みが共有されていた。例えば、太宰の39歳の時に書かれた代表作『人間失格』(1948)の主人公葉蔵も社会から疎外された人間として設定され、病める者、弱き者の疎外感が共感されているのもその一例であろう。

ところで、一方で太宰は「弱者」の姿勢を取りながらも秩序や制度に対する批判を発していたことから⁴⁾、戦後に入るとメディア等により無頼派として位置づけられたにも拘らず、ここで太宰の後期に語られた「弱さ」への苦悩を想起せざるを得ない。これまで戦中の中期作品等にみえる「弱さ」は太宰のこのような苦悩の告白とは別問題としてみられてきたのではないだろうか。作品から多様な声を響かせている太宰作品を、後期の太宰の告白と関連してどのように考えるべきかという問題がまだ残っていると思われる。

そこで、本論文ではこのようなデカダンス⁵⁾のイメージの裏に隠れた、太宰文学における人間への愛情が込められている部分に注目したい。「太宰の文学はなんらかの形で、人間への愛情を基調としていないものはない」⁶⁾という指摘があるように、人間への愛情とやさしい視

2) 奥野健男(1967)『太宰治論』春秋社、p.9.

3) 奥野健男(1967)前掲書、p.12.

4) 饗庭孝男(1976)『太宰治論』講談社、p.98.

5) 戦後坂口安吾は『墮落論』(1946)において、落ちるところまで落ちていくというデカダンスの論理を宣言した。同じ無頼派である太宰も、実生活の態度、姿勢、行動の反俗の無頼性と共に、作品の下向志向的な感性(弱者の立場を引き受け、自己破壊と破滅の姿勢を取る)のデカダンスのイメージが形成された。

6) 白井吉見(1954)「解説」『現代日本文学全集』第49巻、筑摩書房、p.410.

線が太宰の作品に散りばめられていると思われるからである。

ところで、後期作品には前述した無頼派の思想とは相反するようにみえる、自分の「苦悩の殆ど全部」だという思想が表現されている。それは「己を愛するが如く汝の隣人を愛せよ」⁷⁾という聖書の<隣人愛>についての言及である。

私の苦悩の殆ど全部は、あのイエスといふ人の、「己れを愛するがごとく、汝の隣人を愛せ」といふ難題一つにかかつてみると言つてもいいのである。(『如是我聞』⁸⁾)

それから、<隣人愛>思想の言及はこれに止まらず、戦後の多数のエッセイや手紙等にもみられる。

汝等おのれを愛するが如く、汝の隣人を愛せよ。
これが私の最初のモットーであり、最後のモットーです。
(『返事』⁹⁾)

キリストの己を愛するが如く汝の隣人を愛せよといふ言葉を、私はきつと違つた解釈をしてゐるのではなからうか。あれはもつと別な意味があるのではなからうか。(中略)やはり己も愛さなければいけない。自分の世の中の人に対する感情はやはりいつもはにかみで、(中略)こんなところにも、私の文学の根拠があるような気がするのです。(『わが半生を語る』¹⁰⁾)

いずれも<隣人愛>に関する太宰の真摯な苦悩を語り、<隣人愛>が自分の「苦悩の殆ど全部」、「最初のモットーであり、最後のモットー」であると告白している。引用した『如是我聞』は「太宰の戦前・戦後の

7) 『聖書』マタイ伝(22:39)

8) 太宰治『太宰治全集』第10巻、筑摩書房、p.362.

本文で引用した太宰治の文章は、『太宰治全集』全12巻(筑摩書房、1975-1977)を底本とした。また、同『全集』は本文において『全集』と省略表記した。

9) 『全集』第10巻、p.308.

10) 『全集』第10巻、p.328.

あらゆる文学的実践を傾けて生み出された、最も優れた「随想」と定義され、「太宰文学の総決算」¹¹⁾としても位置づけられているだけに、ここに告白されている〈隣人愛〉は、重要な意味を持つと思われる。なおかつ、貴司山治との交換書簡である『返事』にも「これが私の最初のモットーであり、最後のモットーです」と述べ、〈隣人愛〉というテーマは太宰の文学世界における重要なモチーフになっていることが確認できる。太宰文学において〈隣人愛〉はどのような意義を持ち、太宰が語る〈隣人〉とは誰を意味しているのか。

各言葉の用例を初出資料から記録している『日本国語大辞典』(第二版、2003)によると、キリスト教的な意味で〈隣人愛〉の言葉を最初に使ったのは太宰小説である¹²⁾と記録しているが、太宰は聖書の〈隣人愛〉の意味を独自の解釈を通し理解していたと思われる。ここでは、太宰の多くの作品の中で〈隣人愛〉を語る時に、世の中の弱き者、つまり疎外された者が同時に語られている点に注目したい。

この例は『人間失格』(1948)¹³⁾などの後期作品からもみることができ、太宰の中期作品である『惜別』は国策小説というアイデンティティの中に、作品の所々に〈隣人愛〉という言葉の引用や思想の影響が読まれている。そこで、『惜別』に使われるキリスト教の要素と〈隣人愛〉の言葉を分析し、太宰文学における〈隣人愛〉の有り様を明らかにしていきたい。とりわけ、この小説の中では世界の負の部分に位置している「日本語不自由組」¹⁴⁾に注目し、太宰が使っていた〈隣人愛〉の性格を明らかにしたい。

11) 山下明(1977)「太宰文学の総決算としての『如是我聞』」『文学と教育』102、文学教育研究者集団、pp.27-35.

12) 日本国語大辞典第二版編集委員会(2003)『日本国語大辞典第二版』小学館 <https://japanknowledge.com> (검색일:2018.10.14)

「隣人愛」用例・(1)身近な人々への愛: 悟浄出世(1942)<中島敦>(2)キリスト教の愛で、他者への愛: 「チャンス(1946)」<太宰治>

13) 李智賢(2015)「太宰治の『人間失格』-疎外者「葉蔵」の〈隣人〉-」『日語日文学研究』93(2)、韓国日語日文学会、pp.373-392.

14) 『惜別』本文の「かくの如く観じ来れば、後に至つて、この藤野先生と周さんと私と三人が結んだあの親密な同盟も、何の事は無い、日本語不自由組の同気相求めた結果のものに過ぎなかつたのではないか、と情け無い気持ちにもなるが」(太宰治『太宰治全集』第7巻、p.217)等に登場する〈日本語不自由組〉という言葉から引用した。

2. 太宰作品の〈隣人愛〉とキリスト教言説

太宰が〈隣人〉または〈隣人愛〉を語り始めたのは、1937年の「思案の敗北」という作品からである。その後も多数の太宰作品に〈隣人愛〉は引用されていた。

上述したように、聖書的な意味の〈隣人愛〉の言葉を使った文献は太宰小説が最初であると推定され¹⁵⁾、太宰作品以前は「身近な人々への愛」の意味で使われていたようである。またこの時期は太宰が聖書に接し始めた時期にも一致している¹⁶⁾。次の表 I は太宰作品の中で、〈隣人〉、〈隣人愛〉という言葉と、〈隣人愛〉の関連聖句が直接的・間接的に引用された作品を調べたものである。調査範囲は、田中良彦の調査¹⁷⁾の上に〈隣人愛〉の関連聖句が間接的に引用されているものまで範囲を拡張した。聖書の〈隣人愛〉が引用されているとみえる作品は、表 I にあるように総18作品である。

〈隣人愛の使用用例—表 I 18)〉

	発表年	〈隣人愛〉
前期 (1932-1937)	1937	「思案の敗北」(1937・12)
	1939	「テカダン抗議」(1939・10)
中期 (1938-1945)	1941	「犯しもせぬ罪を」(1941・2)
		「風の便り」(1941・2)

15) 日本国語大辞典第二版編集委員会(2003)『日本国語大辞典第二版』、小学館 <https://japanknowledge.com> (검색일:2018.10.14)

16) 「太宰が聖書を読むようになったのは、彼が東京に出てきてから、そして非合法運動から退いてからのことだと思う」寺園司(1964)「太宰治と聖書」『国語と国文学』41(12)、東京大学国語国文学会、pp.47-57.

17) 田中良彦(2009)「太宰治『人間失格』と聖書—「隣人」をめぐる」『国文学解釈と鑑賞』74(4)、至文堂、pp.178-183.

18) この三期(前期、中期、後期)の区分は、奥野健男(『太宰治論』春秋社、1967)の区分によった。選定基準は、作品中に〈隣人〉または〈隣人愛〉という言葉が使われているか、「汝己を愛するが如く隣人を愛せよ」(マタイ伝19:19)の聖句及び関連内容が引用されている作品である。なおかつ、〈隣人愛〉について田中良彦の調査(2009、前掲論文)があるが、この表は聖句の間接的な引用まで調査したものになる。

	1944	「花吹雪」(1944・8)
	1945	「惜別」(1945・9)
		「瘤取り」(1945・10)
後期 (1945-1948)	1946	「貨幣」(1946・2)
		「十五年間」(1946・4)
		「返事」(1946・5)
		「苦悩の年鑑」(1946・6)
		「冬の花火」(1946・6)
		「チャンス」(1946・7)
	1947	「文学の曠野に」(1947・2)
		「わが半生を語る」(1947・12)
	1948	「響応夫人」(1948・1)
		「如是我聞」(1948・3、5~7)
		「人間失格」(1948・6~8)

太宰が聖書を読み始めた中期以降の作品から<隣人愛>が語られ、後期に至るまで聖書の「己を愛するが如く、汝の隣人を愛せよ」¹⁹⁾の聖句等がよく引用されていた。

この<隣人愛>が太宰の中期以降の大切な随想であったことに関連して、太宰の<隣人愛>に注目した従来の考察も発見される。川井累子は太宰の初期作品から<他のため><隣人愛>等の思想が表れている作品を分類し、作品ごとにその範囲と意味も変わっていることを指摘している²⁰⁾。この論文は太宰の<隣人愛>に初めて注目したという点で意義を持つが、残念ながら<隣人愛>が登場する作品の分類に止まっており、具体的な作品分析は行われていない。また、寺園司は太宰の<隣人愛>の解釈に独自の偏りがあると指摘し、「第一の誠命(心を尽くして神を愛すること)をおろそかにして、第二の方(隣人愛)に己の力を尽くそうとしたのが太宰であったが、それではイエスの精神に沿わないことになる」²¹⁾と論じたことがある。

19) マタイ伝(19:19)(22:39)、マルコ伝(12:31)、ルカ伝(10:27)

20) 川井累子(1967)『「他のため」の倫理と隣人愛の展開』『愛文』愛媛大学文理学部国語国文研究会、pp.44-50.

21) 寺園司(1964)前掲論文、pp.47-57.

太宰の<隣人愛>についてこれまで具体的な考察が難しかったのは、「愛情が愛情として正面きつて表れているような愛情は滅多に描かれない」²²⁾といった指摘があるように太宰の作品に<隣人愛>自体をテーマとして書かれている小説があまりなく、<隣人愛>の言葉が断片的に引用されていることに止まっているためである。例えば、『風の便り』(1941)には、「誠実な人間とは隣人愛を实践する者だ」のような文章がある。ここには「誠実な人間とは、どんな人間だか知つてゐますか。おのれを愛するが如く他の者を愛する事の出来る人だけが誠実なのです。」「君はいつも自分の事ばかりを考へてゐます。自分と、それから家族の者、せいぜい周囲の、自分に利益を齎すやうな具合のよい二、三人の人を愛してゐるだけぢやないか。」²³⁾などのように聖書の隣人愛の聖句の引用に止まって、小説全体の内容との関連はあまりみられない。

これと関連して、1945年に発表された『惜別』は太宰の<隣人愛>の思想が織り込まれているようにみえる作品で、太宰文学における<隣人愛>の意味と性格が多少読まれると思われる。この小説は中国の文豪である魯迅の日本留学時代、すなわち仙台の医学専門学校に留学していた周樹人を主人公にし、歴史的事実を題材にしている作品である。この点と、書かれた当時の時代の特殊性という成立事情から『惜別』は太宰作品の中でも異色的な作品とみなされてきた²⁴⁾。そもそもこの小説は、大東亜宣言の文学作品化の要請により執筆された作品であるが「国体」概念とは相反するキリスト教言説が同時に語られている点で注目できる。内閣情報局による大東亜宣言が発表された戦争時代は、キリスト教言説が厳しく制限されていた時期であった。『惜別』は日露戦争時代である明治三十年代を舞台とし、作品中にキリスト教と関連した言葉がよく登場しているのである。

作品中に教会は、西洋の科学、医学とともに文明開化の象徴として

22) 白井吉見(1954)「解説」『現代日本文学全集』第49巻、筑摩書房、p.410.

23) 太宰治『風の便り』『太宰治全集』第4巻、p.341.

24) 川村湊(1991)「『惜別』論—「大東亜の親和」の幻」『国文学解釈と鑑賞』36、至文堂、pp.68-75.

描かれていて、例えば「和洋酒缶詰、外国煙草屋、ブラザア軒という洋食屋」「蓄音機を聞かせる店やら写真屋」などと並び、仙台の近代的文化を作る存在として描かれている。また、「あの教会の大袈裟な身振りは、私の信仰を遮るのです」「教会の職業的なヤソ坊主の偽善家みたいな悲愴な表情や、またその教会に通ふ若い男女のキザに澄ました態度に辟易して」とあるように、偽善的な態度も批判している。これは聖書の「汝ら、見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。」²⁵⁾という偽善を警戒する言葉に基づいている表現としてみることができる。

その他に、この小説には<隣人愛>の聖句もよく引用されている。「周さん」と「私」の二人の主人公は<隣人愛>を「非常な尊敬」を感じる思想として語っている。作品中に<隣人愛>の言葉が登場している部分は以下のようなものである。

またキリスト教に就いても、僕は、キリストの『おのれを愛するが如く隣人を愛せよ』といふ思想には非常な尊敬を感じ、ほとんどキリストにすがりたい気持ちにさへなつた事もあるのですが、しかし、あの教会の大袈裟な身振りは、私の信仰を遮るのです²⁶⁾。

周さんは私と同様、キリストの隣人愛には大いに敬意を表し、十字架につかざるを得ない義人の宿命を仰恋する事に於いても敢えて人後に落ちるものでは無かつたが、しかし、どうも、教会の職業的なヤソ坊主の偽善家みたいな悲愴な表情や、またその教会に通ふ若い男女のキザに澄ました態度に辟易して、仙台の市中にずいぶんたくさん散在してゐる教会にももつばら敬遠の策をとり²⁷⁾

相互の尊敬といふものであらうか、隣人愛とでもいふものであらうか、或ひは、正義とでもいふべきものであらうか、いやいや、そんな気持ちをみんなひつくるめた何かぼんやりして、もつと大きいもののやうな気がする²⁸⁾。 下線は引用者による)

25) マタイ伝(6:1)

26) 『全集』第7巻、p.269.

27) 『全集』第7巻、p.264.

28) 『全集』第7巻、p.217-218.

上の引用は、仙台の近代文明を経験し、キリスト教についても好意を持っていた「周さん」が、聖書の〈隣人愛〉の思想に大いに敬意を表したと語る部分である。自国の民衆の救済について不安を感じていた「周さん」が教会の〈隣人愛〉の思想には敬愛を表現し、小説の語り手である「私」も〈隣人愛〉の思想に惹かれている。作品における二人の主人公が、共に〈隣人愛〉に敬意を表しているのである。

また、上述したように〈隣人愛〉に尊敬を感じながら〈偽善〉には嫌悪も表現している。「私」は「ヤソのヤソくさきは真のヤソに非ず、と断じ、支那の儒者先生たちが孔孟の精神を歪曲せしめたやうに、キリストの教へも、外国のヤソ坊主たちが墮落せしめてしまつたのだ、とさへ語つてゐた事があつた」とのように〈偽善〉については徹底的に排撃した太宰の表現も発見することができる。

従来、この作品での〈隣人愛〉の強調を中国人周樹人との友情に結びつける指摘があったが²⁹⁾、これは「大東亜共同宣言」の「独立親和」原則に沿って、内容と関連付けた解釈であった。また、藤野先生が語る「中国の人をばかにせず、対等な友人として付き合いなさい」「この友情は「東洋本来の道義」にまで通じるのだ」等の内容に連なる友情を語ることで、聖書的な意味の〈隣人愛〉の解釈とは違うと言えよう。

太宰は、実際〈隣人愛〉をどのように理解し、作品中に使っていたのか。太宰が語った〈隣人愛〉の性格を救命するため三章では「疎外された者」に注目し〈隣人愛〉を考察してみたい。

3. 「日本語不自由組」という疎外者と太宰の〈隣人愛〉

ここでは、『惜別』に〈隣人愛〉の言葉の意味がどのように語られているか、太宰が語る〈隣人愛〉の性格を検討したい。

『惜別』は外国人の魯迅と「私」の友情を描いているが、ある程度歴史的事実に基づいて書かれたとしても、多くの場合作家の体験により再

29) 富阪容子(1993)「太宰治『惜別』論—『風の便り』との関連—」『文化論輯』3、神戸女学院大学大学院日本文化学専攻学友会、pp.51-66.

創造され、太宰の意識が反映されている箇所が多い。そのため、太宰の中国に関する認識と魯迅への理解の貧弱さを指摘されることもあった³⁰⁾。

例えば、『惜別』における田舎出身の「私」が方言の問題で交友関係に難しさを感じていたという部分は、魯迅の伝記的事実に基づいているというより、津軽の方言にコンプレックスを持っていた太宰の経験に基づいているとしてみることができるだろう。太宰は言葉による疎外を感じた経験を、『惜別』においては言葉に苦しめられる「私」と「周さん」の描写を通し再現しているようである。

東京文化や中央文化に憧れ、東北の涯の標準語も通ぜぬ田舎者であることを恥じに思っていたという太宰は³¹⁾、しばしば作品の中において言葉に対するコンプレックスを描くことがあった。

あれは仙台の人でね、少し言葉に仙台なまりがあるからあまり女には好かれないやうだけれど、まあ、かへつてそのほうがいい。(『未帰還の友に』³²⁾)

それまで私の津軽訛りの泥臭い文章をていねいに直して下さつてみた井伏さんは驚き(『十五年間』³³⁾)

このように作品の中にかがわれる、<言葉>によってもたらされる疎外感や劣等感が、『惜別』の「私」が感じる疎外感へと形象化されるのである。

『惜別』でも、太宰は言葉による疎外の感覚を表現している。語り手の「私」という人物は、ひどい田舎訛りで、「その新入生たちにまじつて、冗談を言ひ合ふ勇氣もなく、かへつてひがんで、孤立を気取り、下宿も学校から遠く離れた懸庁の裏に定めて、同級生の誰とも親しく

30) 尾崎秀樹(1961)「大東亜共同宣言と二つの作品—『女の一生』と『惜別』」『文学』29-8、岩波書店(編)、pp.921-922.

31) 奥野健男(1990)「太宰文学入門」『新文芸読本太宰治』河出出版新社、p.8.

32) 『全集』第8巻、pp.234-235.

33) 『全集』第8巻、p.202.

口をきかなかつたのは勿論、その素人下宿の家族の人たちとも、滅多に打ち解けた話をする事は無³⁴⁾かった。つまり、田舎出身の「私」は、仙台ではいわゆる異邦人で、言葉の劣等感の故にみずからを疎外している。だが一方で、人見知りをする「私」は、「私」よりも日本語が不自由であるはずの外国人「周さん」には気軽にしゃべることができるのである。

人みしりをするといふ点では決して人後に落ちない私が、京、大阪どころか、海のかなたの遠い異国からやつて来た留学生と、何のこだわりも無く親しく交際をはじめたのは、それは勿論、あの周さんの大きい人格の然らしめたところであらうが、他にもう一つ、周さんと話をしてゐる時だけは、私は自分の田舎者の憂鬱から完全に解放されるといふまことに卑近な原因もあつたやうである。事実、私は周さんと話してゐる時には、自分の言葉の田舎訛りが少しも苦にならず、自分でも不思議なくらい気軽に洒落や冗談を飛ばす事が出来た³⁵⁾。(下線は引用者による)

「私」は「周さん」と話している時は、「自分のれのい言葉の訛りに就いての苦慮から解放されるといふ秘密のよろこびがあつて、そんな事が二人の親しい交友を成立させた³⁶⁾」というように、田舎者の憂鬱から解放され、自分の田舎訛りが少しも苦にならず、気軽に話すことができる。他の新入生とあまり付き合いがなかった「私」が清国の留学生である「周さん」と親しくなり友達になった理由は、互いに日本語が不自由だという苦しみを共有していたのが大きい。言葉の異邦人である「私」は、異国からきた留学生の魯迅の異邦人としての位置に同質感を感じるのである。

さらに、「私」は恩師である藤野先生にも「周さん」に感じたような親和の情を感じる。「私」のこのような三人の親密な同盟は、言葉の不自由によるやや特別なものでもある。「かくの如く観じ来れば、後に至

34) 『全集』第7巻、p.179.

35) 『全集』第7巻、p.185.

36) 『全集』第7巻、p.215.

つて、この藤野先生と周さんと私と三人が結んだあの親密な同盟も、何の事は無い、日本語不自由組の同気相求めた結果のものに過ぎなかつたのではないか、と情け無い気持ちにもなるが」³⁷⁾との表現のように「日本語不自由組の同気相求めた結果のもの」なのである。

もっとも、三人の結び付きは言葉のコンプレックスにより始まったのではあっても、それ以上の大きい同盟のような要素もあり、「私」(田中)はこの関係について、「観念を超越した何か大きいものに向かつての信憑と努力」、「相互の尊敬」、「隣人愛」、「正義」³⁸⁾というようなものであり「そんな気持ちをみんなひつくるめたなんかぼんやりして、もつと大きいもの」³⁹⁾があるような関係であると説明している。

ここでは<隣人愛>という言葉に例えて表現している部分に注目したい。「周さん」と、「私」の恩師として登場する藤野先生は、関西訛りで苦労しているという点で共通している。「私」は藤野先生の授業が「周さん」が熱意をこめて褒めていたほど楽しい授業でもなく、丁寧を極めた講義にはやりきれないと思うが、先生が言葉使いに苦労している姿を痛々しく感じて自分と同類な人であるという親近感を感じている。

もつとも、痛々しいといふ感じは、特に私ひとりだけに強く響いたものかも知れない。といふわけは、この先生は、その講義に於いてずるぶご自分の言葉使ひに気をくばつておいでの様子で、私もまた自分の言葉の田舎訛りにはかねがね苦労させられてゐるので、他人のそんな気持には敏感に同情できて、そのせりもあつて、特に痛々しいなどと感じたのかも知れなかつた。先生は、ひどい関西訛りであつた。それを隠さうと、なみなみならぬ努力をしてをられるやうであつたが、異国人の周さんにさへ、特徴のある語調だと看破されてゐるくらゐ、やつぱりその講義には、かなりの関西訛りがまじつてゐた⁴⁰⁾。(下線は引用者による)

37) 『全集』第7巻、p.217.

38) 『全集』第7巻、p.217.

39) 『全集』第7巻、p.218.

40) 『全集』第7巻、pp.216-217.

このように、藤野先生がひどい関西訛りを隠そうと努力をしている姿に、言葉に苦勞していた「私」が「他人のそんな気持ちに敏感に同情」するようになったのである。

また、「周さん」に対しては「私より以上に東京言葉を使ふのに苦勞してゐる人を見つけて私が大いに気をよくしたといふ事」⁴¹⁾が、私と「周さん」との親交の端緒となり、「この清国留学生よりは、たしかに日本語がうまいといふ自信があつたのである」⁴²⁾などの表現から、「私」が「周さん」と藤野先生と親交を結ぶようになった理由として、「私」の劣等感が大いに作用していたことがわかる。「私」は「日本語不自由組」という被疎外者の感覚で結ばれた「周さん」と藤野先生に、親密の喜びと、強い絆を感じるのである。

ここに、「言葉」を軸とした疎外感覚と分離感覚が生じているのが見て取れる。自分を疎外され外に置かれている者として認識する「私」は、同じく外にいる者として「周さん」と藤野先生を発見して、彼らの苦勞を同情し、言語において他者として感じる疎外感を共感する。注目すべき点は、「私」が「周さん」と藤野先生に親しみを感じ、同盟関係のような間柄を築きつつ、その関係を「隣人愛に似ているもの」として性格づけている部分である。

相互の尊敬といふものであらうか、隣人愛とでもいふものであらうか、或ひは、正義とでもいふべきものであらうか、いやいや、そんな気持ちをみんなひつくるめた何かぼんやりして、もつと大きいもののやうな気がする。⁴³⁾

「私」は、自分より言葉に苦勞している二人への感情を、「隣人愛」と言えるものとして表現した。彼らの持つ苦情を特に痛々しく感じ「他人のそんな気持ちには敏感に同情できて、そのせゐもあつて、特に痛々しいなどと感じたのかも知れなかつた」⁴⁴⁾と語り、敏感に同情する感

41) 『全集』第7巻、p.186.

42) 『全集』第7巻、p.186.

43) 『全集』第7巻、pp.217-218.

44) 『全集』第7巻、pp.216-217.

情を<隣人愛>という言葉に例えている。

「私」は、自分のように言葉によって疎外されているように見える二人に特別な愛情と同情、つまり被疎外者へ向ける関心を寄せるのである。

また、ここに「親密」、「同情」のような言葉が使われていることにも注意を払いたい。つまり、『惜別』で語る<隣人愛>とは、劣等感から始まる共感、及び同情のような感情が伴われるマイナーの連帯でもあり、太宰はそのような苦痛の共感に<隣人愛>の言葉を借りて表現しているのである。

つまり、太宰文学の<隣人愛>を理解することにあつて、苦しんでいる者たちに「同情」し、「同類」の「親密感」を感じるということは、重要な要素だと言える。『家庭の幸福』などの晩年の作品には被疎外者への共感と配慮として、家庭のエゴイズムの批判が語られ、そのような被疎外者の苦痛を共感する思いが<隣人愛>の言葉とともに描かれている。

『人間失格』において葉蔵は貧乏くさい女給のツネ子に恋の感情を寄せるが、それは同質感、連帯感に似たような意識であると言える。これと同様な感情の構造が『惜別』でも確認できることから、太宰が語る<隣人愛>とは、コンプレックスを共有した「親和感」、「同質感」と、「共感」から生じる同情のような感情であると解釈してもよいだろう。

『惜別』のこのような三人の同盟について、「<私>と<周さん>の友情は、「日本語不自由組」というところから、すなわちマイナスの連盟というところから一步も出ない」⁴⁵⁾ものであるという指摘している。同様に「私」が<隣人愛>を語る時、自分の痛みが投影されているマイナーの共感のようなものが存在することがみられる。ここの<隣人愛>は自分より言葉が不自由な「周さん」に出会って感じる、憂鬱から解放してくれる同質感が出発点になっているのである。そして、「私」は自分と同じように言葉に苦勞している「周さん」と藤野先生に対する感情を「隣人愛とでもいふやうな」ものだとする。

即ち、『惜別』で語る<隣人愛>の性格は、負の親和感、つまり「私」の

45) 川村湊(1991) 前掲論文、p.72.

ような日陰者の存在への「同質感」、「同情」、「親密感」というキーワードを持って説明することができるだろう。

『人間失格』においては、「非合法運動」の同志に説明し難い親密感を感じたという部分では46)、「世の中の合法といふもののほうが、かえっておそろしく」「自分は、自分を生れた時からの日陰者のような気がしていて、世間から、あれは日陰者だと指差されている程のひとと逢うと、自分は、必ず、優しい心になるのです。」との内容が出る。太宰文学の登場人物は、自分と同類の負の存在に対してはやさしい心になり、彼らの痛みに関心し敏感に同情する。

でも、仙台留学生である「私」が方言の問題で学校の中で異人になり、不安・苦痛等を感じたとして、「周さん」と藤野先生も同じく不安・苦痛を感じていたとは断定できない。太宰が語る<隣人愛>の方法は自分の痛みを投射している同情のような、やや屈折したものになっている。太宰の<隣人愛>は、主人公の苦痛を他人に投射してそこに共感し同情するということで、これは太宰の他の作品からも発見されている47)。

尤も、このような太宰の<隣人愛>の使い方は、伝統的な聖書の<隣人愛>の解釈48)とは少し距離がある。なおかつ、太宰が購読していたという聖書雑誌『聖書知識』の1939年1月号(「イエス伝研究第142講」)における<隣人愛>の内容とも異なるが、『聖書知識』には「即ち全力を尽くして神を愛することが真に人を愛する道であり、全力を尽くして隣人を愛することが真に神を愛する方法であるのである」⁴⁹⁾「即ちヒトに対する愛を以て神に対する愛と全く

46) 「非合法。自分には、それが幽かに楽しかったのです。むしろ、居心地がよかったです。世の中の合法といふもののほうが、かえっておそろしく、(それには、底知れず強いものが予感せられます)そのからくりが不可解で、とてもその窓の無い、底冷えのする部屋には坐つておられず、外は非合法の海であつても、それに飛び込んで泳いで、やがて死に到るほうが、自分には、いつそ気楽のやうでした。」『人間失格』(『全集』第9巻、p.433)

47) 『駆込み訴へ』(1940)、『東京だより』(1944)、『人間失格』(1948)等。

48) 「今助けを必要としている人の隣人になってあげること」、「聖書のルカ伝一〇章に語られている善きサマリア人の態度」(須藤隆仙(2004)『世界宗教研語大事典』新人物往来社、p.1096)

同一となし給うた点である。」と言って、<隣人愛>がすべての「ヒト」を対象にすると見受けられる。『惜別』の「私」の主観的な視線による弱き者、疎外された者への同情と共感のような<隣人愛>の解釈は独特なものとしてみるのできるのである。

太宰は『惜別』の中で<隣人愛>思想への尊敬を語り、またその表現は太宰の偽らぬ心情とみてよいほど、<隣人愛>に真剣に向けられていた。だが一方で、太宰の<隣人愛>は自分の痛みを投射した、被疎外者を見る共感意識に基づいている。

さらに、それは「親密感」「同類」「親和」といった言葉と深く関連されている。太宰の意識の中で<隣人愛>の思想は、これらの言葉を通して形成されて行ったと言えよう。

5. 終わりに

以上のように太宰治文学における<隣人愛>の問題を、疎外された者との関連性から考察した。『惜別』において<隣人愛>という言葉がどのように使われているかをみるために、「私」が「周さん」と「藤野先生」の<日本語不自由組>に向けて用いている<隣人愛>について考察した。そこで太宰が語る<隣人愛>は、コンプレックスを共有した「親和感」と、「同質感」が大きく作用していたことが明らかになった。つまり、「私」が<隣人愛>のような感情を感じたという三人の<日本語不自由組>は、負の同盟の親和感により結成されたもので、この<隣人愛>は「私」の立場からの視線が投影された一方的なことであると言えよう。

これは従来の聖書的な<隣人愛>の解釈とは違う、太宰独自の解釈であるが、自分を疎外者として意識し、且つ、自分のことのような疎外者に同情する太宰ならではの<隣人愛>としてみるのできるのである。

『人間失格』(1948)の主人公の葉蔵は、「自分には、禍ひのかたまりが十個あつて、その中の一個でも、隣人が背負つたら、その一個だけでも充分に隣人の生命取りになるのではあるまいかと、思つた事さへ

ありました」⁴⁹⁾と、自分の持っている苦しみを一個でも<隣人>に背負わせたくないというやさしい心を表現したことがある。この部分も同様に太宰の<隣人>に対する考えをうかがえる部分であろう。

つまり、太宰小説の主人公たちは、自分と同類の被疎外者たちをみて、最初は「気をよくして」「解放される」と感じ、被疎外者たちに対し親和感を感じるが、これは、自分の痛みを投射した、一方的な同情のような性格を持っていることがわかる。

自分自身を疎外された者だと思っていた太宰は、「自分と同じような」、「絶えず「日陰者」の思いに悩まされている」⁵⁰⁾人々を必死に見つけ出し、共感とやさしさ、同情を送っていた。太宰文学における疎外された者とは、太宰自身である同時に、太宰が感情移入する<隣人愛>の対象であると言えるのである。

太宰の『畜犬談』には、「芸術家は、もともと弱い者の味方だった筈なんだ」「弱者の友なんだ。芸術家にとって、これが出発で、また最高の目的なんだ。」⁵¹⁾という言葉がある。このようにして疎外された者と弱者の味方になるのが、太宰の芸術家としての目的の一つであったと言えるのではないだろうか。

参考文献

- 李智賢(2015)「太宰治の『人間失格』-疎外者「葉蔵」の<隣人>-」『日語日文学研究』93(2)、韓国日語日文学会、pp.373-392.
- 홍명희(2015)「다자이 오사무(太宰治)의 <국책소설>과 루쉰(魯迅)-『석별』에서 <나(私)>에 의해 회상되는 ‘저우 씨(周さん)’-」『일본어문학』70, 일본어문학회, pp.402-403.
- 饗庭孝男(1976)『太宰治論』講談社、p.98.
- 白井吉見(1954)「解説」『現代日本文学全集』第49巻 筑摩書房、p.410.
- 奥野健男(1967)『太宰治論』春秋社、p.9.
- _____ (1990)『新文芸読本太宰治』河出出版新社、p.8.

49) 『全集』第9巻、p.403.

50) 奥野健男(1967)『太宰治論』春秋社、p.18.

51) 『全集』第3巻、p.51.

- 尾崎秀樹(1961)「大東亜共同宣言と二つの作品—『女の一生』と『惜別』」『文学』29-8、岩波書店、pp. 910-928.
- 川井累子(1967)「『他のため』の倫理と隣人愛の展開」『愛文』6、愛媛大学文理学部国語国文研究会、pp.44-50.
- 川村湊(1991)「『惜別』論—『大東亜の親和』の幻」『国文学解釈と鑑賞』36、至文堂、pp. 68-75.
- 佐藤泰正(1997)「弱者の倫理」『太宰治論』翰林書房、p.205.
- 須藤隆仙(2004)『世界宗教用語大事典』新人物往来社、p.1096.
- 田中良彦(2009)「太宰治『人間失格』と聖書—『隣人』をめぐって」『国文学解釈と鑑賞』74(4)、至文堂、pp.178-183.
- 寺園司(1964)「太宰治と聖書」『国語と国文学』41(12)、東京大学国語国文学会、pp.47-57.
- 富阪容子(1993)「太宰治『惜別』論—『風の便り』との関連—」『文化論輯』3、神戸女学院大学大学院日本文学専攻学友会、pp.51-66.
- 山下明(1977)「太宰文学の総決算としての『如是我聞』」『文学と教育』102、文学教育研究者集団、pp.27-35.

日本国語大辞典第二版編集委員会(2003)『日本国語大辞典第二版』デジタル版、小学館
<https://japanknowledge.com> (검색일:2018.10.14)

* 本論文は、筆者の博士論文「『疎外された者』と『隣人愛』—1937年~1948年の作品にみる太宰治—」(2015)の一部を修正・加筆したものである。

<Abstract>

Dazai Osamu: 'Alienated Persons' and 'Neighborly Love'
- Based on 'A Farewell with Regret' -

Lee, Ji-Hyun

This study considers an issue of 'neighborly love' in the literature of Dazai Osamu which has not been researched up to date, by connecting the issue with 'alienated persons.' Dazai had begun to use the word 'neighborly love' since 1937 when he began to read the Bible. In the Japanese literature, Dazai seems to be the first writer using 'neighborly love' in the biblical sense. However, it can be found that Dazai's unique interpretation is reflected in such 'neighborly love.'

'A Farewell with Regret,' a novel written at the time when 'neighborly love' began to appear frequently, depicts a form of 'neighborly love' which 'I' use for the acquaintances, 'a group of persons without competence in Japanese language.' For the 'neighborly love' used by Dazai, 'a feeling of affinity or kinship' between persons who share inferiority complex is a significant factor. In this novel, there appears to be empathy between the minority who have built an alliance based on feeling alienated because of linguistic incompetence.

Dazai's novels frequently describe alienated persons similar to himself and unilateral sympathies where he projected his pain into them. The writer tried to depict the 'neighborly love,' which is of 'Dazai,' that finds persons under the shade who are suffering from a sense of alienation like him and gives empathy to them. This trend carried over to his later works including 'No Longer Human.'

Key words : *A Farewell with Regret*, alienated person, 'neighborly love,'
empathy between the minority, Dazai Osamu

투 고 일 : 2018년 10월 14일

심 사 일 : 2018년 10월 17일

게재확정일 : 2018년 11월 7일